認定医症例報告

QOL の向上を求めコーヌス義歯からインプラント義歯へ変更した症例

鈴木 章

Improvement of Patient's Quality of Life by Changing the Treatment Plan from Cone-crown Retained Denture to Implant Prosthesis

Suzuki Akira

抄 録

症例の概要：本症例は咀嚼・審美障害を主訴とする 51 歳男性に対して、支台歯への負担軽減、清掃性の向上、審美性などの点から、コーヌス義歯治療を選択した。しかし、食事が味気ない、温度感覚がないなどの口腔機能感覚のさらなる改善を求められたため、上顎臼歯部にインプラント補綴治療を行った。前歯部についてはコーヌス義歯の内外冠を利用した可撤性ブリッジに改良した。

考察：本症例を通じて、患者の要望に応じた適切な治療計画を選択することの難しさが痛感された。

結論：治療計画を変更したことにより、口腔内不快感は消失し患者の QOL は改善された。定期的にメンテナンスを行い装着後 3 年経過するが、良好に推移しており患者も大変満足している。

和文キーワード

QOL (quality of life), コーヌス義歯, インプラント補綴, 可撤性ブリッジ, 患者からの要求

I. 緒 言

補綴処置は咀嚼機能を回復し、口腔領域の快適な働きを保ち患者の QOL (Quality of life) を回復するために必要である¹⁾。欠損に対する補綴処置の選択肢には、可撤性義歯、固定性義歯、インプラントなどが考えられるが、最終的な治療方針は患者に欠損病態と各治療法を把握させ、全身的、経済的な条件のもとに患者自身がどのような治療を望むのかについて、主治医とのコンセンサスを得たうえで決定される。

本症例は、歯周疾患を伴う欠損補綴治療において、コーヌス義歯での最終補綴治療を行うことで患者の QOL を回復した。しかし、治療終了 1 年後に患者自身の口腔保健への認知度および求める QOL が向上し、補綴治療に対する要求度や期待度が上昇したため

に、再度インプラント補綴治療へと治療計画の変更を行い、良好な経過が得られたものである。

II. 症例の概要

患 者：51 歳，男性。

主 訴：咀嚼障害および審美障害。

現 症：初診時の口腔内は上顎では 641|12456 が欠損 (Kennedy III 級) であり、下顎では 7|7 が欠損 (Kennedy II 級) であった。Eichner 分類では B-1 であった。上顎右側には ⑦6⑤4③，上顎前歯部には ②1|12③ のブリッジ，上顎左側には部分床義歯が装着されていた。全顎的に歯槽骨の中等度の水平的吸収が認められたが、上顎右側ブリッジ部と上顎左側大臼歯部では動揺度 3 度，上顎前歯ブリッジ部では動揺度 2 度を示していた。また同時に咬合平面の乱

図 1 Orthopantomography at the first examination
初診時パノラマ X 線写真

れが認められた (図 1)。

III. 治療内容と経過

1. 診断と治療方針

進行性の歯周疾患に罹患していることにより 75|78 は投棄、スケーリングなどの対処療法を行っても動揺が大きく、咀嚼が困難であること、また根面のプラークや歯石の十分な除去が不可能であると診断し、これらを抜去し、抜去後は即時義歯により咬合の維持安定を図ることとした。また、保存可能な残存歯については歯周治療を行い、同時に 32|3 は根尖性歯周炎のため前歯部ブリッジを除去し感染根管治療を行うこととした。上顎前歯欠損部にはフィクスチャーを埋入できるだけの必要十分な残存骨量が存在せず、インプラント治療は困難であると思われた。また、上顎臼歯部については、インプラント治療の適応ではあるが、治療期間が長期に及ぶこと、またインプラント埋入時の外科的処置に対する患者の不安が大きいことから、この時点では見合わせた。有床義歯の設計にあたっては、患者の審美的要求が高く、現在のクラスプ義歯には満足していないため、審美的に優れ、残存歯の二次固定効果と補綴的プラークコントロールに有利な²⁾コーヌス義歯を選択した。

2. 治療内容と経過

平成 11 年 1 月：75|78 を抜去後 (図 2)，即時義歯を装着し、咬合の維持安定を図った。

平成 11 年 2 月：32|3 の感染根管治療と、全顎にわたる歯周治療を行った。

図 2 Intraoral views after extraction
抜歯後口腔内写真

平成 11 年 4 月：歯周治療終了後、コーヌス義歯による治療を開始した。

平成 11 年 6 月：7654③②1|12③4567 のコーヌス義歯を装着した (図 3)。

平成 11 年 7 月：義歯装着後、義歯床後縁部に違和感が認められたため、同部位の調整を行った。しかし、本症例のような少数歯残存症例での支持の主体は粘膜であるため、義歯床を全部床義歯に準じて口蓋部に広く設定し、支持を積極的に取り入れる必要があることを説明し、経過観察を行った。

平成 12 年 7 月：1 年後のリコール時には義歯の維持安定は保たれており、残存歯の歯周状態も健全であった。しかし、口蓋部を広く被覆しているため、食事を摂っても味気ない、温度感覚がないなどの口腔感覚に対する不満を訴えた。その後何度か義歯調整を繰り返したが、患者の十分な満足は得られなかった。そこで、再度インプラント補綴治療の説明を行った。初診時と比べて患者の口腔保健の認知度が高まり、インプラント埋入時の外科的処置に対する不安が取り除かれていたこと、禁煙にも成功していたことなどから判断し、今回はインプラントによる補綴処置を行うこととした。通法に従い、765|567 部に IMZ インプラントの一次手術を行った。

平成 12 年 10 月：インプラント二次手術を行った。

図 3 Intraoral views of the Konus telescope denture
コーヌスクローネ義歯装着口腔内写真

図 5 Intraoral views of the removable bridge
可撤性ブリッジ装着口腔内写真

図 4 Orthopantomography of the removable bridge
可撤性ブリッジ装着後のパノラマ X 線写真

平成 13 年 1 月：臼歯部インプラントにプロビジョナルレストレーションを装着した。また前歯部については、コーヌス義歯の内外冠を利用した③②1|12③の可撤性ブリッジに設計を変更した。さらに①|②および65|456の補綴物に対して審美的な改善を求められたため、硬質レジン前装冠にて

補綴物の再製作を行った。

平成 13 年 2 月：上顎臼歯部インプラントに硬質レジン前装冠を装着した（図 4, 5）。装着後、経過は良好で口腔感覚の改善が認められ、十分な満足が得られた。2 カ月ごとに定期検診を行い、ブラッシング指導およびスケーリングを行っている。

IV. 考 察

本症例は、歯周疾患を伴う欠損補綴の治療としてコーヌス義歯を選択し、ある程度の患者の QOL の回復を得ることができた。しかし、コーヌス義歯装着 1 年後においても、口腔感覚については患者の十分な満足が得られていなかった。むしろ、患者の口腔保健の認知度および求める QOL が向上し、治療に対する要求度や期待度が上昇したため、当初はある程度の患者の満足が得られても、いずれは不満へと変化していったと解釈できる。したがって、医療従事者は患者の満

足度をさらに追究して、これをその後の対応に反映する必要があると考えられる。本症例では、初診時に患者がインプラント治療を希望しなかったが、一時的とはいえコーヌス義歯による補綴治療によって清掃性の良い環境を作ることが、その後のインプラント治療を成功させることに結びついたと考えられる。本症例を通じて患者の要望に応じた適切な治療方針を選択することの難しさが痛感された。

V. 結 論

治療に対する患者の満足度を絶えず認識することは、医療従事者にとって医療の質の保証と改善のために有効な指標である。本症例においても、治療計画を変更したことにより患者の満足はさらに充足され、

QOL が改善されたことはきわめて重要であると思われる。

文 献

- 1) Budtz-Jørgensen E (五十嵐順正, 権田悦通). Prosthodontics for the elderly : Diagnosis and treatment (高齢者の補綴治療 49-73, 東京:クインテッセンス出版, 2001), 1999.
- 2) Körber KH (河野正司, 五十嵐順正). Konuskronen (コーヌスクローネ 70-97, 東京:医歯薬出版, 1986), 1983.

著者連絡先: 鈴木 章

〒399-0781 長野県塩尻市広丘郷原 1780
TEL・FAX: 0263-51-2046

Improvement of Patient's Quality of Life by Changing the Treatment Plan from Cone-crown Retained Denture to Implant Prosthesis

Suzuki Akira

Department of Removable Prosthodontics, Matsumoto Dental University

J Jpn Prosthodont Soc 49 : 105-108, 2005

ABSTRACT

Patient : The patient was a 51-year-old male with a chief complaint of masticatory disturbance and anesthetic problem for the upper partially edentulous region. The cone-crown retained denture was selected as a first treatment plan. However, sufficient satisfaction was not achieved because of oral discomfort, such as bulkiness of the denture and gustatory sensation. Therefore, the treatment plan had to be changed to improve these problems. A second plan using hybrid prostheses was selected, i.e. implant prosthesis for the premolar and molar edentulous region and removable bridge for the incisor and canine region.

Discussion : This case suggests the difficulty of selecting a treatment plan matching the patient's demands.

Conclusion : Remarkable improvement for the oral discomfort was observed and the patient's QOL was improved by careful planning of the prosthetic treatment. No problem has been observed for three years after the second prosthetic intervention.

Key words

QOL (quality of life), cone-crown retained denture, implant prosthesis, removable bridge, patient's demands